

蘇軾の巨視の哲学

悲哀を止揚する蘇軾の巨視の哲学は、人生の悲哀のみには満たないという認識に始まる。悲哀はいかにも人生のいたるところにある。しかし人生はそれのみで成り立っているのであろうか。悲哀が有れば歓喜があり、あざなえる縄の如きであるのが、人生ではないか。悲哀のみに没入するのは、愚である。更に又一步をすすめては、次の如く考える。そもそも常識が不幸とし、それによって悲哀を生む所のものが、果たして不幸であるかどうか。多角な巨視的な目で見直すことが必要ではないか。(黄州における詩は、以上の哲学を語る例である。)

宋詩概説 吉川幸次郎 一六〇頁より抄出

中国名詩選(下) 川合康三 三〇一頁

記憶に残っていた誰かの詩句、そこに述べられたのとそっくりの状況や心境に自分が遭遇して、その句が思い出される。まるで今の自分の思いを、その詩が予知しているかのようだ、不思議な体験を記す。

(一〇八〇年) 四十四歳

少年時嘗過一村院見壁上有詩云夜涼疑有雨院靜似無僧不知何人

詩也宿黃州禪智寺寺僧皆不在夜半雨作尚記此詩故作一絶

少年の時、嘗て一村院よに過り、壁上に詩有るを見るに云う、「夜涼しくして雨有るかと疑い、院靜かにして僧無きに似る」と。何人の作れるかを知らざるなり。黄州の禪智寺に宿り、寺僧皆お不在らず、夜半に雨あ作る。尚お此の詩を記し、故に一絶を作る

佛燈漸暗饑鼠出 仏灯漸く暗くして 饑鼠出ず

山雨忽來脩竹鳴 山雨忽ち来りて 脩竹鳴る

知是何人舊詩句 知らん是れ 何人の 旧詩句なるか

已應知我此時情 已に心に我が此の時の情を知るべし